

論語の学堂（陽明学研究所）開催報告

事業概要

本事業は本学の歴史及び建学の精神に基づき、平成24年3月から開始した事業である。本学の淵源は宝徳元年（1949）に遠祖長尾昌賢が学問所を開設したのに始まり、世世漢学の教授を以て地域教育に貢献してきた。

古来、漢学と呼び習わされている学問の中心にあるのが四書・五経と総称される中国の古典であり、就中日本では古代より論語が重んじられてきた。そして本学は論語の「仁」を建学の精神とし、学生へ全人教育を行っている。福祉は特に人と人との関係構築が重視される分野であり、人間関係を築く上で最も大事なのが他者を己の如く感じる心、要するにそれが「仁」である。福祉と論語は決して無関係ではない。

この論語の精神、つまり「仁」を広く社会に還元するために、万を期して本年（平成24年）より公開講座として開始するものである。

第1回／平成24年3月13日

▶ 講演者：石川 忠久先生 二松学舎大学名誉教授

▶ テーマ：「論語と漢詩—教育を詠う漢詩」

NHK 漢詩紀行でお馴染みの石川忠久先生が「論語と漢詩—教育を詠う漢詩」と題して、『論語』先進篇第25章の描写を、日本・中国の知識人たちがどのように漢詩に詠ったのか、実例を示しながら講演されました。論語という、ややもすれば堅苦しいと勘違いされる書物が、決してそのような存在ではなく、詩の題材にされるほど身近な存在であったことを述べられました。



第2回／平成24年10月15日

▶ 講演者：鈴木 利定先生 理事長・学長

▶ テーマ：「論語の読み方について」

鈴木利定本学理事長・学長が「論語の読み方」と題して、実生活を営む上での実践的論語の読み方を解説しました。孔子は今からおよそ2500年前の人でありながら、今を生きる私たちと同様に悩み考えていた事を、解りやすい比喻を用いながら話しを進めました。



第3回／平成24年10月29日

▶ 講演者：井上 新甫先生 思想家・自民党ぐんま政経塾塾長

▶ テーマ：「天心は人心、人心は天心」

人間が生きていく上で、何故「学」や「志」が重要なのか？井上先生は論語に基づきながら、「学」や「志」の重要性を一人一人に問いながら講義を進めました。聴講された方々は根源的な問いかけに、改めて自己を振り返り「学」や「志」の意義を再発見しました。



第4回／平成24年10月29日

▶ 講演者：鈴木 利定先生 理事長・学長

▶ テーマ：「続論語の読み方」

孔子の時代に於いても古典とされていた五経（易経・書経・詩経・礼記・春秋左氏伝）を理解することが、論語を読み解く際のキーポイントになることを力説しました。また、古代の帝王たちが自己の鑑戒とするために側に置いた「宥坐之器」のレプリカを披露し、中庸の精神が如何に重要かを述べられました。



第5回／平成24年11月5日

▶ 講演者：塚本 忠男 先生 前群馬県立前橋清陵高等学校長

▶ テーマ：「学而時習之、不亦説乎」解

教育の場に於いて論語の教えが、どれほど重要かを御自身の経験から説明なされました。「『論語』とあゆむ」ということは、真心をもって誠実に生きることであり、それが教育に携わる人間に求められる態度であることを、訴えられました。また書道の歴史を顔真卿と小坂奇石を例に学問と書の関係を示べられました。



第6回／平成24年11月12日

▶ 講演者：岡野 康幸 先生 助教

▶ テーマ：「論語と朱子」

南宋時代の思想家朱熹の『論語集注』は、日本でも江戸時代以降広範囲に読まれた注釈書です。朱熹の注釈が論語を解釈する上で、どれだけ影響を与えていたのかを、各篇に基づいて説明されました。また我々がイメージとして抱く朱子学が、決して教条主義的なものでないことを力説されました。



第7回／平成24年11月19日

▶ 講演者：市川 忠夫 先生 教授

▶ テーマ：「良寛と論語に学ぶ～今に生きるいのちの輝き～」

市川忠夫教授が、「良寛と論語に学ぶ ～今に生きるいのちの輝き～」という演題で講義をなさいました。市川先生は上州良寛会会長としても著名であり、良寛と論語の関係を述べるのに、最も適した方です。良寛に関する豊富な資料に基づき、生き生きとした良寛像を提示してくださいました。



第8回／平成24年11月26日

▶ 講演者：中里 昌之 先生 教授

▶ テーマ：「『論語』と俳文芸について」

中里昌之教授が「『論語』と俳文芸について」と題して、論語がどのように形を変え、文芸という雅の世界で楽しまれたかを、松尾芭蕉や村上鬼城を例に出して説明されました。

また中里先生は、上毛新聞に掲載されている「上毛俳壇」の選者の一人であり、斯道の第一人者です。中里教授の講義に、聴講された方々も讃嘆の声をあげられました。

